2011
J・A・C
秋田山岳
平成23年11月　発行
No. 85
社団法人 日本山岳会秋田支部
秋田市千秋久保田町
2番23号　佐々木方
TEL・FAX 018(833)2525
発行者　佐々木　民　秀
編集者　鈴　木　裕　子

朝鮮半島最高峰・長白山登山

長白山「天池」を訪ねて

鈴木裕子

昨年、佐々木支部長が長白山視察登山に参加したことから、支部山行として「長白山縦走」を企画した。（アルパインツアー社に手配を依頼）

いよいよ出発という三日前から支部長が体調を崩し、急遽参加出来なくなり、私に世話役等が回ってきた。

九月十日、秋田空港を出発し、韓国・仁川空港に着く。秋田からの参加者八名、首都圏からの参加者二名の計十名。お天気は晴、明日は中国・延吉空港から西坡山門へ。この度は、日本山岳会福岡支部と栃木県ひだまりグループ、秋田支部の三グループが一緒だった。

十一日、延吉空港でガイドの朴春虹さん（中国国籍の朝鮮族）らの出迎えを受け、専用バスで登山口のある西坡山門へ向かう。ここは中国・吉林省延辺朝鮮民族自治州、長白山には朝鮮族、満州族の発祥伝説があり、朝鮮族の聖地であること等の説明を聞く。中国に住む少数民族の悲しさをガイドの愛称春ちゃんは、この地を耕し繁栄させてきたのは朝鮮民族である、中国政府の漢族同化政策で、中国語を話せないと就職も出来ない、ハングルの読み書きが出来ない若い世代が増え、民族の伝統が消えてゆく、それが悲しいと・・・。

十二日、雲が厚い朝を迎える。西坡山門ゲートからシャトルバスに乗り、登山口に着いた時は辺り一面ガスで覆われ、少し先も見えない、雨がぱらついてきた。

雨具を着け、石の階段と平行に並ぶ木階段を一三〇〇段ほど登りきると、そこは中国と北朝鮮の国境であった。

ここから「天池」が見えるはずであるがガスのため何も見えない。現地の李徳春リーダーから、ここから下山した方がよいと説明があったが、三グループのリーダーが話し合い、青石峰まで登るグループと、下山して渓谷散策のグループとに別れることになり、秋田支部は五名が登山、五名が下山、私は下山することにした。

シャトルバスが長白山渓谷に到着する頃、雲の切れ間から僅かながら陽も射し始め、登山組みはどうしているのかと思いながら、原生林の中、渓谷に沿って整備された木道を散策した。大峡谷の侵食されて出来た奇岩群は、羅漢像が並んでいるようにみえた。

登山ゲートで下山したグループと合流し、北坡山門に向かう。もし、お天気が回復したら天池までということであったが、山頂部は雲に覆われていたので、長白山瀑布と小天池等を散策して長白山温泉へ。

十三日、晴。四輪駆動車に乗り、北坡天文峰展望台へ。車はスピードをあげ、カーブをグイグイ登って行く。座席のバーにしっかりと掴まっていても体が左右に揺れ、崖から転がり落ちるようで怖かった。

天文峰から碧い碧い神秘の湖「天池」を見下ろす。昨日はガスのため全く見えなかったので嬉しい、この「天池」を見るために来たのだから、晴れて良かった。

対岸は北朝鮮、将軍峰から長い長い歩道が湖畔まで築かれているのが見えていた。

天文峰展望台にて

またスリル満点の四輪駆動車に乗り、ゲートまで。山岳道路から見渡す満州の延々と続く広大な高原や耕作地、それらを日本軍が手にしたかったことがわかるような気もした。

龍井の町には旧日本総領事館（現在は市役所として使用）の建物があり、その地下室は投獄所であったと聞く。

近くには関東軍の宿舎がまだ残されており、市営住宅のようになっているとのこと。これから整備し、歴史地区として保存する方向で検討されているとのことだった。

豆満江に沿ってバスは国境の町・図們へ。豆満江を隔てて対岸は北朝鮮、北朝鮮の山々は山頂部まで耕作されているのか、樹木は見当たらなかった。

ここで筏に乗り豆満江を遊覧。国境を売り物にしていると思ったが、朝鮮民族は泪を堪えて対岸を見ると聞き、複雑な気持ちであった。北朝鮮側の林間に監視兵か、軍服姿の人影が見えていた。国境の川に架かる橋の向こう側の北朝鮮側の白い建物には「金日成」の大きな肖像画が掲げられていた。

十四日、延吉市で朝鮮民族市場を見学してから空路、仁川空港に戻り、訪韓の度にお世話になっている「韓国山岳会同友会」の李載洪さん等を囲んで夕食。

十五日、秋田空港着。体調の戻った佐々木支部長の出迎えを受けて、無事解散。

今回の長白山登山は、山に登り天池を眺める事だけではなく、李徳春リーダーやガイド春ちゃんの言葉の端々に感ずる朝鮮民族としての誇りと悲しみ、分断されている故国のこと、満州のこと等、今まで気づきもしなかった事に思いを馳せた山旅でもあった。

参加者　今野昌雄　鈴木裕子
佐藤博　高橋忠雄　三浦眞六
佐々木長秀
会員外　木村幸夫　菅生艶子
長谷川弘子

長白山登山に参加して

三浦　眞六

★青石峰登山（標高二六六二m）

登山初日（九月十二日）、長白山の火口湖天池を取り巻く外輪山の一角、北朝鮮と中国の国境五号定戒碑まで登ったが、悪天候のため長白山縦走を断念。

しかし、せめて縦走路の最高地点である青石峰だけは登りたいと、雨と雲の中を出発した。背丈が短く筆先のようふっくらしたトウヤクリンドウが寒さに縮み、一面に広がる中を言葉もなく登った。

やがて、縦走路が鞍部となっている地点に着くと、雲が一瞬途切れて、急な岩斜面の上に青石峰が見えた。

ガス中の青石峰山頂にて

その東側斜面はスッパリと切り落ちて漂う雲の下に消えている。ガイドは天池が見えたと言うが、私には湖面と礫との境が判らない。急斜面の下に漂う雲の下に天池の姿を想像する。最後の登りは、浮き石や濡れた岩で火口壁から転落しないようガイド達が心配する中を登る。青石峰の頂上は二～三人でいっぱいなため、記念写真は交代で行う。

★長白瀑布（落差六八m）

中国と北朝鮮の国境である火口湖・天池より流れ出る唯一の川「二道白河」が、天池から流れ出た直下にあるのが長白瀑布。遠望する滝は、両側の岩壁が狭まった最奥に、白く輝いた三筋となって砕け散っていた。

視界を遮るものは何もなく滝を中心に火山特有の層をなした岩壁が両側に百八十度に広がっている。視界に入りきれない。まるで西部劇のワイド画面を見ているような気持でしばし見とれてしまった。霧と散った滝が川となり私の足下を流れる。やがて松花江から黒竜江・アムール川となりオホーツク海へと下る。冬には流氷となり知床の沿岸に流れ着くかもと、ガイドの春ちゃんが説明してくれた。

★駆け登る四輪駆動車

（標高差九五〇mを十五分弱）

九月十三日七時すぎ、北坡登山口を二台の四輪駆動車に分乗し出発した。

長白瀑布を背景に

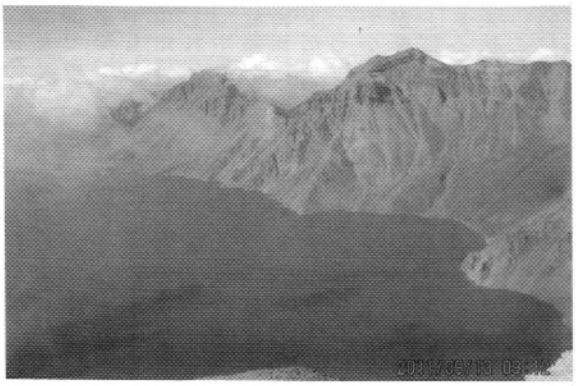
私は韓国から来たと思われる男性に挟まれて最後部に座る。走り初めて直ぐ、私の身体は右隣の男性に強く押しつけられ、次のカーブでは左隣の男性に情け容赦なく押しつけられた。申し訳なく思い軽く会釈して顔を見た。迷惑そうな顔、これではいけないと両足をカーブの度に一生懸命踏ん張った。それでも足りず、両手も前席に必死で突っ張った。グライダーがウインチに引っ張られ飛び上がるとき、怖さのあまり両手両足が思いっきり踏ん張った時の緊張感を思い出した。

手足にしびれを感ずる頃、走りが穏やかになり外の景色を見る余裕が出てきた。最後のカーブも終わり頂上駅に着く。タイヤをきしませ標高差九五〇mを十五分弱で登った。下車する時に見た涼しげな顔した運転手さんに脱帽。

下る時、あれだけタイヤをきしませて登ったから、さぞ真っ黒いタイヤの跡があるだろうと思ったら全く無し。下車して居並ぶ四輪駆動車のタイヤに触ってみた。違う、私達が使っているタイヤとは全く違う。

★天池

四輪駆動車を降り、良く整備された広い登山道を登ること十分、「おっ」思わず声にならない歓声をあげ、その底に、濃淡のある藍色模様の湖面が沈んでいる。それを取り囲む外輪山の内側は、鋭い斜面を頂上に突き上げている。頂きの外側は、対照的な緩斜面が続いている。昨日の青石峰が雲の中から頂きを出そうとしている。その圧巻に息を呑んだ。



展望台から望む天池

火口の直径は一〇粁かも知れない、あまりに大きすぎる。もし、富士山を標高二五〇〇mで水平に切ったとしても、直径はこれ程の大きさにはならない。それ程の山が吹っ飛んだ跡だと思うとその爆発力は想像もつかない。この爆発により国が衰退し、日本にも多くの灰が降ったであろう。そんなことを想像しながら神々しい気持で眺める。

天文峰を下る時、北に目を転じれば広々とした山岳地帯が果てしなく続く。これがかつての満州。若い頃の私にとって遠い場所なのに身近なように思われた。

その理由は、会話の中に頻繁に出てくる吉林省・ハルピン・戸満江（図們江）等の地名。そして満鉄・満蒙開拓団を経験し、辛い思いをした方々が身近にいた。「かつてこの土地に一五〇万の日本人が住んでいた。しかし今は、住民の三十八％もの朝鮮民族が住んでいる」と中国人朝鮮民族である春ちゃんが説明。しかし、その表情には寂しさが漂っているように感じたのは私の気のせいか。そして私たちは、北朝鮮との国境を流れる豆満江へ向かった。

秋田～ソウル定期便就航
十周年記念セレモニー

十月二十九日開催された標記セレモニーに、慶南支部との交流登山の写真が展示されました。

秋田県ホームページには、老姑壇、月出山、弥勒山の交流登山が掲載されております。

全国支部懇談会兼東北・北海道地区集会報告

佐々木　長秀

第二十七回全国支部懇談会兼第二十八回東北・北海道地区集会が、十月十五日（土）、十六日（日）の二日間、宮城県栗原市の「ハイルザーム栗駒」で開催された。全国二十八支部から一七二名が参加。秋田支部からは、佐々木（民）・北林・今野・鈴木（裕）・佐々木（民）・佐々木（長）の五名参加。

ハイルザームとは、ドイツ語で健康増進施設とのこと。九種類の温泉プールとアリーナやコテージなどがあり、栗駒国定公園の標高六五〇mに建つ、大変立派な施設であった。

午後三時から、開催地の栗原市長と高橋宮城支部長からの歓迎の挨拶の後、東北大学大学院風間教授による「岩手・宮城内陸地震と東北太平洋沖地震の地盤災害」と題した講演が行われた。

「岩手・宮城内陸地震の特徴は、巨大な地すべりと土石流を発生させた地盤災害である。斜面の安定性など、起こってからではなく、普段からの防災対策が必要だ。」・「東北太平洋沖地震の特徴は、被害の広域性と津波・原発事故による復旧作業の長期化である。液状化対策・地盤の危険度調査、災害廃棄物・放射能汚染土壌処理が課題である。」など、自らの現地調査に基づいた、専門家としての考え方が述べられた。

恒例のアトラクションは、地元栗原市の「猿飛来（さっとびらい）神楽会」の皆さんによる「牛若丸出世一代記」の公演。迫力のある素晴らしい演奏と舞いに、参加者一同大いに楽しむことが出来た。

午後六時三十分からの懇親会は、予定を上まわる参加者であったことから、大広間とレストランの二会場に別れての開催となった。東北・北海道地区はレストラン。尾上本会会長からは、「公益法人化・会員減少・財政難等、課題も多いが、この支部懇談会を機に会員相互の結束を強めて行こう。」との挨拶があり、高橋宮城支部長からは、「全国からのご支援に感謝する。これからは東北の元気をアピールして行きたい。」との決意表明があった。

続いて、佐々木秋田支部長が、全国の支部を代表して乾杯の音頭を取り、本格的な交流に入った。お互いに持ち寄った地酒（秋田は「太平山」）を酌み交わし、大懇親会は、午後九時過ぎまで続いた。

翌十六日、記念山行として、栗駒山行と世界谷地原生花園散策が実施された。佐々木（民）・今野・鈴木（裕）・佐々木（長）は山行に、北林は散策へ参加。

午前六時二十五分、登山口のイワカガミ平（一一〇〇m）を出発。参加者一五〇名、七班編成で、秋田支部は三班に入る。レストハウス手前に、当初予定していた東栗駒コースの案内板が見える。しかし、昨夜の雨により、コース途中の新湯沢での徒渉が危険であるため変更し、中央コースの往復とな

った。

我々はレストハウスの横を直進する。石をコンクリートで固めた立派な登山道である。しかし、その上を多量の水が勢いよく流れて来る。まるで沢登りでもしているようだ。東栗駒コースを中止にしたのは正しい判断だったかもしれない。

ホテルからイワカガミ平付近までは、紅葉の真っ盛りであったが、登山道の両側はすでに枯れ葉が多く、ナナカマドだけが真っ赤な実を目立たせていた。

七時二十分、小ピーク（一四〇八m）で小休止。山頂を雲が覆い、今にも雨が降って来そうだ。しかし、振り返ると雲の切れ間から宮城・岩手の山々を見ることが出来る。周辺の山々を佐々木秋田支部長から説明していただく。

これまでの舗装道路が終わり、一般的な登山道となり歩き易い。しかし次第に傾斜が急になり、ジグザグ道となる。やがて風が強くなり雨も降って来た。その中で、色とりどりの雨具を装備した百五十名の日本山岳会隊の隊列は、たくましく、且つ美しくさえ見える。

七時五十分、東栗駒コースとの分岐に到着。ここからは急な階段状の登山道が続く。二年前の内陸地震の影響なのか、斜面の崩壊防止工事の土のうと木柵が目に付く。程なくするとガスで霞んだ頂上が見えて来た。

八時五分、栗駒山頂（一六二七m）着。まずは、駒形根神社に手を合わせた。秋田県側（須川方面）を望もうとしても、全く視界がきかない。せめて、これまでの秋田側に加えて、宮城側からも栗駒山に登ったことを良しとしなければなるまい。

栗駒山頂にて

八時二十分、頂上ではゆっくり食事をとる様な状況ではないので、テルモスのお湯でチョコレートを口に流し込み、早々に下山開始。東栗駒コースの分岐まで下がると、雲が風に飛ばされ、ハッキリと山頂が見えて来た。登山中は気づかなかったが、下山道の両側は一面の「草もみじ」だ。紅葉をも凌ぐすばらしい光景の突然の出現に、一同、大いなる感動を覚えた。小ピークで「草もみじ」に映える栗駒山頂をバックにして、記念撮影を行う。

沢登りの様だった登山道も、今は嘘の様に水がなくなり、立派な舗装道路が現れている。天気が回復したため、次々に登って来る登山者と擦れ違う。

九時四十五分、イワカガミ平の登山口に全員無事に到着。「これからもう一度栗駒に登ろうか」との元気な声も多く聞かれた

秋田支部の福田（光）、鎌田、熊谷の三名が、秋田県側須川コースを登ったが、悪天候のため時間差が生じ、山頂で合流できなかった。

新入会員紹介

○高橋洋二　No.一四九七五
横手市旭川三―二―二〇
昭和十九年八月三〇日生
電話　〇一八二―三二―八六九六
入会　平成二十三年九月
秋田県立大曲高等学校登山部OB会
横手美入野岳友会　横手山岳協会
紹介者　今野昌雄　佐々木民秀
平成二十一年八月、静岡県・赤石岳を最後に「深田久弥の日本百名山」完登

○後藤浩二　No.一四九八一
秋田市千秋城下町五―十八　―一〇一号
昭和二十二年十二月十五日生
電話　〇一八―八三三―五〇四八
入会　平成二十三年九月
紹介者　今野昌雄　佐々木民秀
秋田山の会

佐藤博会員「日本百名山」完登

佐藤博会員は七月二十六日、長野県・焼岳を最後に「深田久弥の日本百名山」を完登しました。

川島由夫会員「日本三百名山」完登

川島由夫会員は平成二十三年に日本山岳会選定の「日本三百名山」を完登しました。

（千葉支部会報から）

奥村清明会員

太平山入山日数「三三〇〇日」を越え、現在記録更新中です。

支部会員で日本百名山、東北百名山等の完登やその他の山行に関する記録を達成した会員がおりましたら事務局までお知らせください。

自然保護委員会の自然観察会

七月二十二日～二十四日、鳥海山で行われた自然観察会「鳥海山の湧水・花を求めて」に福田光子、大船武彦参加